EVENT REPORT

地域の枠を超えたこれからのまちづくりとは。《前編》

「わたしたちのまちづくりサミット」を長野県野沢温泉村で開催

人口減少が進む日本では、特に東京をはじめとする大都市以外の地域での人不足・リソース不足が深刻になりつつあります。そんな時代だからこそ、各地域が手を取り合い、双方向で活性化していくことが必要不可欠ではないか―。わたしたちのまちづくりサミットの大きなテーマです。

株式会社野沢温泉企画（以下「野沢温泉企画」）、三菱地所株式会社（以下「三菱地所」）、株式会社三菱地所設計（以下「三菱地所設計」）が「わたまちサミット実行委員会」として、国内のさまざまな地域の活性化を目指しまちづくりに取り組むプレイヤーが集結し、日本全国の各地域におけるチャレンジを発信・共有する公開イベント「わたしたちのまちづくりサミット」（以下「わたまちサミット」）が長野県野沢温泉村で 2023 年 11 月 10 日（金）に開催されました。

本イベントは、2023 年 3 月に秋田県男鹿市にて、稲とアガベ株式会社、三菱地所、三菱地所設計の 3 社で開催したサミットに続く 2 地域目で、「次の 100 年につながる循環を生み出す装置」をテーマに、世代を超えてつなげていくべき「これからのまちづくり」のあり方を模索する、『わたまちサミット』と『わたまち歩き』の 2 つのプログラムを行いました。

本レポートでは、サミット当日の様子をご紹介します。

PROGRAM

（本ページにて紹介）
- ■ 野沢温泉村まち歩き by 野沢温泉企画　（限定プログラム）
- ■ わたしたちのまちづくりサミット　オープニングトーク
- ■ のざわまちトーク｜河野健児 氏　野沢温泉の『裏側』／水とひとがつくる環境
- ■ のざわまちトークセッション｜通年でにぎわう村を目指して
- ■ わたまち講演｜長尾成浩 氏　大村湾での活動について／自律的なつながりをつくる仕掛け

（《後編》にて紹介）
- ■ わたまちピッチ｜岡住修兵 氏 ＋ 谷口千春 氏 ＋ 前田大介 氏 ＋ 長岡里奈 氏
- ■ わたまちトーク｜地域に継続的な循環をもたらす装置とは ＆ 地域のウチとソトをつなぐ仕掛けづくりとは
- ■ クロージングトーク

野沢温泉村まち歩き by 野沢温泉企画

サミットに先立ち、午前中には参加者 30 名の限定プログラムとして、野沢温泉企画代表の石田遼さんの案内でまち歩きを実施しました。

石田さんの案内で「大湯通り」の「GURUGURU」ほかを見学

まずは、村のメインストリート「大湯通り」にある、野沢温泉企画が運営するミュージックバー「GURUGURU」へ。使われなくなっていた新聞販売店をリノベーションし、定期借家というかたちで開業しました。ウィンタースポーツにバックグラウンドを持つお客さんなどが 1 日に 100 名ほど来店し、クラブのような場として使われているとのこと。通りを歩く知り合いとガラス越しに挨拶できる、開かれた空間です。
「野沢温泉には『もったいない建物』がたくさんある」という石田さん。シャッターが下りてしまった建物が多いこの通りを、スキーや温泉でにぎわう冬だけでなく通年使われる場所にしたい、という思いでまちづくりを進めています。まちの人からは「通りの雰囲気が変わったね」という言葉をもらっているそうです。

次に向かったのは、70～90℃にもなる熱湯湧泉、麻釜（おがま）。地元の方に、野菜や温泉卵を茹でるために使われています。
山に降った雨は、20年かけて地下水となり、50年かけて温泉として湧き出します。村民の皆さんの間には、自然から授かった水の恵みを村民や来街者にどのように分け与えるか、という考え方が根付いているといいます。

麻釜（おがま）。温泉の力で渋みが抜け、おいしい干柿ができるそう

こうした考え方は、利用者は無料（賽銭箱へのお気持ち）で入湯できる、村に13か所ある小さな温泉「外湯」に表れています。村民が運営コストを寄付し、当番制のボランティアで掃除などの維持管理をしています。
ここには、自分の家の風呂ではなく毎日温泉に通うという独特な文化が根付いているのです。

湯沢神社の秋の例祭では、神輿を担いで、酒を飲みながら村中を練り歩き、最後に急な階段を駆け上がります。近くには野沢菜の発祥の地とされる健命寺が。また、毎年1月15日に開催される道祖神祭りでは、村の人びと総出で巨大な櫓を燃やすそう。この村には、生まれ年ごとの世代に名前がついていて、年代ごとに祭りの執行役となって代々これを引き継いでいくなど、強固なコミュニティがある、との話に参加者一同驚きでした。

野沢温泉企画が運営する「野沢温泉ロッヂ」（1969 年竣工）は、建築家・吉阪隆正の設計による名建築。現在も宿泊施設として生き続けています。これに隣接して、「ロッヂ」をリスペクトしたデザインの「新館」が、古谷デザイン建築設計事務所の設計で 2023 年 10 月に竣工しました。

「野沢温泉ロッジ新館（左）と「野沢温泉ロッヂ」（右）

ここでは、村の集客がウィンタースポーツの季節に偏っていることから雇用が安定せず、移住することが難しいという課題に対して、野沢温泉村に通年の魅力をつくり出し、これを伝えていくことによって、まずは通年の観光需要を増やすための雇用を創出し、定住者を増やすという循環を目指しているそうです。

また、オーストラリアからの移住者により、缶詰工場だった建物をリノベーションした、クラフトジンとウイスキーをつくる「野沢温泉蒸留所」も開業するなど、温かいコミュニティとまちをよくしたいという情熱を持つ移住者が、ともに将来を見据えて、まちに新しい風を吹き込んでいます。

オープニングトーク

左から広瀬さん（三菱地所）、三好さん（三菱地所設計）、石田さん（野沢温泉企画）

サミットのスタートは、実行委員長の石田遼さん（野沢温泉企画代表）、企画を担った三菱地所の広瀬拓哉さん、事務局を務めた三菱地所設計の三好史晃さんのオープニングトークから。今回の企画を野沢温泉村で行った理由を語りました。

石田　「1 年半前に野沢温泉企画を立ち上げてから、月に 3 回程度この村に通い、将来にわたるまちづくりについて考え続けてきました。このサミットでは、日本全国から先進的なまちづくりの取り組みをされているゲストの方を迎え、この先 10 年、100 年のまちづくりについて議論できればと思っています」

広瀬　「三菱地所が取り組む『めぐるめくプロジェクト』では、農と食がめぐり続けるやさしい世界をつくる、というビジョンを掲げています。ある小さな地域内だけで取り組みを完結させるのではなく、いろいろなプレイヤーが関わり続ける大きな循環が日本全体に伝わっていくことで、それぞれの地域内の小さな循環が持続可能になっていくと考えています。
まちづくりのチャレンジが進みつつあるこの野沢温泉で、『地域のまちづくり』を自分ごととして皆さんと共有していきたい、という想いから今回のサミット開催に至りました」

三好　「私たち三菱地所設計は、主に都心部で建物の企画や設計に携わる設計事務所です。大規模なプロジェクトが多く、この野沢温泉村での取り組みとはスケールがだいぶ異なるとはいえ、私たちのプロジェクトの原点にもまた、まちづくりへの思いがあり、人びとのにぎわいや安らぎなどを与える場づくりを目指しています。
今日は、全国でまちづくりに取り組むプレイヤーの皆さんと『地域に継続的な循環をもたらす装置とは』『地域の内と外をつなぐ仕掛けとは』というテーマでお話ししたいと思います」

三好さんが野沢温泉を訪れた際、村の魅力である雪、野沢菜、田んぼ、ブナ林、お酒、温泉、すべてが水の循環の中にあるという話を聞き、そのイメージを描いたもの。

続いて、野沢温泉村の富井俊雄村長にもご挨拶いただきました。

野沢温泉村 富井敏雄 村長

富井村長　「野沢温泉はスキー産業を中心とした観光立村です。私は 15 年前に村長に立候補した時から、今回のテーマでもあります、まちづくりは百年の大計であり、野沢温泉が自立して栄え続けるには、スキー場に加えて、何としても『温泉観光地としての再生』をしなくてはならないと訴え続けてきました」

「移住してこられる皆さんは、口をそろえて『野沢温泉が好きだ』と言ってくれて大変嬉しく思います。皆さんが行事ごとに集まり、協力し合ってこの村の伝統文化をつないでいけたらよいですし、今日の『まちあるき』のように、温泉街を歩いて楽しめるようなまちづくりを目指したいですね。
まだ『百年の大計』のわずか 15%。後続の人びとにつないでいきたい。皆さんもさまざまな意見を出していただき、まちづくりにぜひ協力いただきたいと思います」

―――

熱い思いが会場にも伝わったところで、いよいよサミット本編が始まりました。前半では「のざわまちトーク」「トークセッション」「わたまち講演」から、それぞれ抜粋してお伝えします。

のざわまちトーク：
野沢温泉の『裏側』／水とひとがつくる環境　河野健児 氏

野沢温泉観光協会の会長を務めるプロスキーヤーの河野健児さんは、100 年前にこの地にスキー場をつくった野沢温泉スキークラブの合言葉『スキーの普及、心身の鍛錬及び、当温泉の発達を図る』から、今後の 100 年に向けた思いを語りました。

河野健児さん

河野　「野沢温泉は、スキー文化・温泉文化・祭り文化が地域の人を育て、ひととひとのつながりをより強固なものにしている地域。野沢人は『スクラムを組んでいる』と言えるでしょう」

「標高 1,000m以上に広がるブナの森が、野沢温泉の豊かな水の源。スキー場・温泉・野沢菜・お米、すべて水の循環から生み出されます。昨年 3 月からは小水力発電によるエネルギー創出を始めました。ブナの森が生む水がエネルギーを生み出している。やはり中心にあるのは水なのです。これが、レジャー、癒し、食、そして 100 年後の次代に向けてエネルギーをもつくり出している。これが野沢温泉の今です」

「私は、この野沢における『地域に継続的な循環をもたらす装置』とは、ひととひとのつながりとして、山を中心とした自然環境を守り・創り・伝えていくことだと思います。これが野沢温泉のアイデンティティです。この土台の上でいろいろな事業者が、それぞれに面白いことに取り組んでいくことが求められているように感じています」

のざわまちトークセッション：
通年でにぎわう村を目指して

左から、石田さん、富井村長、河野さん

富井村長、河野さんを迎えたセッションは、モデュレーターを務める石田さんの**「100 年計画の 15% まで進んできた現在、これからのことをどう考えていますか」**という問いかけからスタートしました。

富井村長　「『昭和の香りを保つまち』を 100 年続けたいという公約は、自分ひとりではできない目標です。取り組み始めれば、次世代、将来の人びとが受け継いでつながっていく、という意味なのです。例えば『建物は窓周りだけでも木でつくってほしい』と言っているのは、いかに村を洗練するかに加え、これを『受け継いでいく』ことが、人のつながりの温かさを育むものではないかと思うからなのです」

河野　「私は一度離れた村に戻り、過去の先輩方が手掛けてきた村の凄さというか、面白さや魅力が見えてきたと感じます。今の野沢温泉があるのは、100 年前の先輩の恩恵があるからです。次世代に私たちがバトンをつないでいくことは重要なことだと思います」

石田　「野沢温泉には、グローバルな視点を持っている方が多いように感じられます」

富井村長　「人口に比して、自ら、単身海外に行く子どもが多いと思います。これから先も続くよう支援したいですね。実は、村で一番予算を使っているのは教育関係なのです。また、グローバルという観点では、野沢出身の人はもちろん、日本人でもどこの国の人でも、野沢に住んでいる人は『野沢温泉の人』としてまちづくりの活動を展開していってほしいと思います」

石田　「新たな移住者と従来からの村民の人口バランスや、そこでどのように『野沢温泉らしさ』を守っていくかについては、どう考えていますか」

富井村長　「来ていただく方は、野沢が好きなら誰でもよいのではないかと思うのです。来るもの拒まず去る者追わず。村には今でも行事がたくさん残っており、皆で一緒になって行うお祭りの文化もあるので、ハートを掴みやすい地域だと思います。既住者・移住者、皆で協力して伝統文化を受け継いでいければと思います」

石田　「『観光の通年化』は重要なテーマです。河野さんの取り組みを教えてもらえますか」

河野　「夏には遊休地をキャンプ施設とするなど、使われていない場所で、例えば SUP をはじめとする体験やサービスを展開しています。スキー、スノーボードなど冬のアクティビティがメインの地域ですが、遊びを提案するだけでなく、野沢温泉のまちづくり、村の変化そのものを見に来ることにまでこれを展開できれば、通年で、世界中から来る人が増えると思います」

石田　「未来への輪郭が見えてきたように思います。民宿などの遊休施設を活用し、賑わいの通年化にもつながるとよいですね。いいところはたくさんある一方、移住したくても家がない、仕事をしたくても夏には仕事がまだまだ少ないといった課題もあります。今日のサミットでヒントを見つけたいと思います」

わたまち講演：
大村湾での活動について
自律的なつながりをつくる仕掛け　長尾 成浩 氏

株式会社ディー・サインでコミュニティ創造やディレクション業務を行いながら、地域商社である株式会社大村湾商事や、コミュニティマネージャーに特化した人材事業を行う株式会社 and ONE を経営。地域活性化のためには、内外の人をつなぎ合わせる仕組みづくりが必要だと語る長尾さんに、長崎県の中央部に位置する大村湾での地域活性化の試みについて紹介いただきました。

長尾成浩さん

「地域活性化のための場を整備する上で大切なことは、『環境が変われば行動が変わる、行動が変われば意識も変わる』という逆算的な発想と、その循環を増やしていくこと。ここで言う環境とは、空間だけでなく、アプリケーション、運用環境などを含みます。この環境にコミュニティマネージャーなどの役割を持つひとを介在させることで大きな変化が期待できると考えています」

「約 100 万人が住んでいる大村湾エリアには、長崎市や佐世保市といったコンテンツも豊富なことから、まずは内需を考えて大村湾をブランディングしよう、という発想で、大村湾商事を立ち上げました。「ジモトガナガサキ」という学生向け人材紹介事業を通して、地域のウチとソトをつなぐ活動をしています。ここでは、ソフトによってソトとつながり、ハードな拠点整備で地域に加わるきっかけをつくることができます。場の提供によって多世代が動き出しています。この活動は他の地域でも展開し、連携させていきたいですね」

「ここではワーケーションの企画も行っていますが、大切なのは地元メンバーと参加者をどうつなぐか、ということ。そのために『敢えて手を出さない』ことを考えています。ウチとソトをつなぐきっかけさえ提供できれば、打ち上げの二次会の頃にはもう僕の手は要りません。地元メンバーがソトのひとを連れて繰り出してくれるのです。
こうした自律的なつながりは、さらに次へとつながっていく。僕が知らない間に、参加者同士でプロジェクトの協業に展開していたこともあり驚きました。簡単ではあるものの、とてもいろいろな広がりを生み出す方法ですので、ぜひ試してみていただけるとよいなと思います。

―――

続きはこちら！

▶NEXT
地域の枠を超えたこれからのまちづくりとは。《後編》
わたしたちのまちづくりサミットを長野県野沢温泉村で開催